

家族からのメッセージ



天川 織 姫

『日記』より

思い付いたことを、つらつら書き綴ったものを投稿します。

読んで頂ければ幸いです。

〈2010年7月××日（月）〉

七夕も近いその日の夕方、参宮橋駅で下車した私は、国立オリンピック記念青少年センターへと向かっていた。歩道橋の際に、濃い緑色の葉をまとった泰山木の巨木が立っている。薄黄色の花芯をそっと包んでいる純白の厚みのある花卉は、やがてゆるりと解けるように広がる。その大輪の花はいかにも誇り高く凛とした佇まいだ。辺りに漂う芳しい香りの只中に立ち尽くし、深呼吸をしてみると、いつとき、体中に幸せが広がるのだった。

この辺りに刻まれた歴史の断片に思いを馳せながら、歩みを進める。その昔、代々木練兵場があった時、二・二

六の事件で捕らえられた青年将校達が処刑された場所であったと、昔聞いたことがある。戦後は、GHQに接収され、ワシントンハイツと呼ばれていた。広大な緑の芝生と悠々と建ち並ぶアメリカ式の白ペンキ塗りの建築。その空間は明らかに日本ではなかった。高度成長期に東京オリンピックが開かれた時には、選手村となったものだ。やがて月日が流れ、日中国交が正常化すると、大勢の中国残留孤児達が肉親探しに来日した。その時の滞在先がこのオリンピック記念センターであったと記憶している。

46年の歳月を経ても、当時の斬新さを失わずにいる建築物には目をみはった。私は眺め入った。そして過去から未来へと続く大河の様な時の流れの中で、ちっぽけな我が身をも顧みただった。

そのセンター棟で、「カタルシスの夕べ」が開かれた。一人の持ち時間が3分×2＝6分の往復リレートークでは、16名が、16通りの人生を16通りの語り口で。多分皆、心の澱や、言い知れない苦痛をかかえているはずなのに、

壇上の顔ぶれにはとても生き生きとした表情と勇気を感じた。心の苦痛を外へ出してみれば、楽になるのだ。きっと。私は途切れなく続く吐露を浴びるように聞いていた。そして、勇気をもらった。カタルシス！これって悪くない。私の心よ、飛んでいけ！タンポポの綿毛が空高く飛んで行くように、鬱積した感情も苦痛もわだかまりも飛んで行け！

〈2010年7月××日（火）〉

いよいよ梅雨が明けたらしい。猛暑が始まった。暑い季節は苦手だ。自分の汗もたまらなく嫌だが、街頭ですれちがう、むき出しの肌は特別に嫌だ。電車のつり革も汗でべとべと。気持ちが悪くてたまらない。だからつかまらない。そうして、急停車でもしようものなら、他の乗客に多大な迷惑を掛けることになる。座席が空いたとしても、直前まで座っていた人の体温がねちちと熱くて、気持ちが悪い。で、たとえ疲れていても、この季節は辞退することが多い。しかし、とことんふらふらの時は、若くて細身の女の子の前に立って、空くのを期待することもないわ

けではない。こうゆう女の子は間違いなく体温が低いのだ。

あ～この季節はつくづく辛い。あと2ヶ月（60日）の辛抱ですかい。う～ん・・・。

〈2010年7月××日（水）〉

ところで、先日の家族向け連続セミナーでゲストの先生の講演は、心に浸みた。愛する風景や、尊敬する人を持つて人生はどれだけ豊かになるかと言う事を知った。だいたい心もとない人生を歩んでしまった私だが、まだ変化（変身）は期待出来るかもしれないと、おぼろげに思った。「心の漂流」、「読書」、「世の中の出来事に目を向けること」。ひたむきな生き方には心が動かされるものだ。

〈2010年7月××日（木）〉

最初は引きこもりから、次には摂食障害を抱えた娘と私は、10年と言う長い年月、一つ屋根の下ですれ違いの暮らしをしてきた。記憶の底からは本当にいろいろな場面が湧き上がって来る。「親子は会話が大事！」と、手紙をしたためてみたりしたが、そのうちに、

いえ、やっぱり実際に「話し合わなくては！」と、思いつめていた時期も今では懐かしい。ドア越しに話しかけてみたが、会話はさっぱり成立せずに行ったところ、そのうちに中から本人が飛び出してきて、もみ合いになった。彼女は「×××××！！」と叫んでいる。頸部への圧迫で気を失い掛けていた私だったが、突然力が湧き上がってきたのだ。「あんたを刑務所に送るわけには行かないんだよ！！」と叫んだ私は、次の瞬間、私よりはるかに長身の娘を突き飛ばしていた。私のどこにそんな力があったのか？不思議だ。火事場の馬鹿力と言うではないか……。そんなところか……。この時のもみ合いで外れたお気に入りの真珠のピアスの片方は、いまだ発見されずにいる。

この出来事から、本人が自分の殻を破ることは、こんなにも大変なものと、知ったように思う。それなのに母親としての私は成すべき事を見つけられずに、依然として混沌の中に身を沈めていたのだった。

家中の電気のスイッチがほとんど壊れていた時代もあった。窓ガラスが冬

の間も割れたまま、家の中と言えども、外気温との差が無い時代も過ごして来た。もう駄目かと思いながら、それでもどうにか生き延びて来た。娘にとっても私にとっても。それは、暗闇に目を凝らし続けた歳月だった。

〈2010年7月××日（金）〉

ある晩秋、夜の10時頃突然電話が鳴った。娘はまだ帰宅しておらず、なんだか嫌な感じだった。恐る恐る電話器を耳につける。「……」『もしもし』『・・は、はい』『こちら××署ですが』（ついにきたか。私は動揺しまいと、からだを硬くして身構えた。最悪の事態を想像していたのだ）

ところが、『実は、娘さんが万引きをしまして。こちらで保護しております。身柄を引き取りに来ていただきたいのですが』そして、電話口で、スーパーの袋の中身を一つずつ取り出して名称を言う。こんなことは必要なのだろうか？最後に担当署員はこう言った。どうしてこんなつまらない食品ばかり？何故でしょう？不思議でなりませんと。私は少し悲しくなった。なぜなら、それはどれも彼女の好きな食べ物ばかり

だったから。その問いに私は「きっと、食べたかったんでしょう」と答えた。署員は無言だった。

〈2010年7月××日（土）〉

やがて、八方塞がりの日が到来した。私は息を潜めて、こっそり見守ることしかもう考えつかなかった。そして、この頃から、私の最大の関心事は「食料問題」へと絞られていった。「栄養を付けなくては！」「食べなきゃ死んじゃう！」例の強迫観念が頭をもたげてきたのだった。せっかくこの世に生を授かったのだから。苦勞して生んだ我が子。ただただ元気でさえいてくれれば。他は何も望まない……………。「だから食料を調達しなくては！」「それも美味しいものをたべさせてやりたい！」こうゆう思考がどんな恐ろしい結果を招くのかとすることについて、私は全くの無知であった……………。そうして、食料調達に奔走する日々が始まった。一日中頭の中は食べ物のことばかり。今日はあそこの店のあれにしよう、とか。同じものが続くとつまらないから、和、洋、中華を日替わりで……………とか。私は本当に張り切

っていた。次第に町の惣菜屋からデパ地下の、より値段の高い、より美味しそうな(?)食品へとエスカレートしていった。

今思えば、この時点で私自身も病を抱えていたことになる。多分本人の病の一部になっていたのだろう。毎日、両手にいっぱい食料を買い、意気揚々と帰宅する。金銭感覚はもう完全に失せていた。「栄養をつけなくっちゃ」

「これだけあれば大丈夫、だいじょうぶ！」と。暗い部屋の中を横切り、彼女の部屋の前に、「今晚のご飯」をそっと置く。翌日、空のプラスチック製の容器を前にして、完食チェックをする事が、私の平常心を保つ唯一の行為だった。おろかな母は、本人が「喜んでいる」と勝手に信じ込んでいた。そして、完食してくれることに無上の喜びを見出したのだった。当時の私は、それらの行為が本当はとても危険なものであることに、まったく気付いていなかった。ましてや、食べ吐きがなされていることなど、知るすべもなかった。2リットルの炭酸系の空のペットボトルが家中にごろごろしているのを

家族からのメッセージ

見て、不思議には思ったが、おろかな母は、その不思議を掘り下げるすべを持たなかった。

そうこうしているうちに、暗闇の向こうから聞こえて来る足音に乱れが生じて来た。「おかしいな??」と思うものの、おろかな母は起こっている事態を想像することすらままならないのだった。

ここまで来て、第三者の機転で、本人は緊急入院をすることとなった。食べ吐きによりカリウムとアルブミンの値が極端に低下し、いつ心臓がとまってもおかしくない状態になってしまっていたのだ。

すんでの所で、三途の川の渡し船には乗らずにすんだ。生命力か。運の強さか。私は、せっかく生んだ我が子を自らあやめてしまうところだった。無意識の行為ほど恐ろしいものは無い。

その後、娘も私もどうにか、しぶとく生き延びてきた。近頃やっと暗いトンネルの向こうに希望の灯が小さく見えてきたような気がする。数多くの出来事は、今では、懐かしい記憶となりつつある。泣いた事も、怒ったことも

・・・全てはいとおしい。生きてきた年月は不器用で、一見すると不幸せそうに思えたりするが、実はそうでなかったようだ。辛かった時期こそ、一生懸命生きた濃い時間だったのではないだろうか。今ではそう思えるようになった。

そして、一つ一つの出来事に含まれていたいろいろなメッセージに今頃気付くのだ。この時間差の妙。もしかしたら私は子供に成長させてもらったのかも知れない。

「もうだめだ～」とか、「すべて手遅れだ」とか・・・言いながらも、こうして今日と言う日を生きる。そして明日もきっと生きている。先はわからないと言いながらも、きっと生きている。摂食障害と言う病と付き合いながら、行きつ戻りつを繰り返しながら・・・。きっと生きて行ける。

「摂食障害の体験が、やがて人生の豊かな実りとなりますから。」との、田中ひな子先生の言葉を道標みちしるべにして筆を置きたいと思う。(天川織姫)